

論文審査の結果の要旨

氏名：吉田 詞温

博士の専攻分野の名称：博士（生物資源科学）

論文題名：日本の牛肉輸出の現状と課題

審査委員：（主 査） 教授 大石 敦志

（副 査） 教授 川手 督也

教授 高橋 巖

わが国が推進している農林水産物・加工食品の輸出の中で、高い輸出目標が掲げられている牛肉が、政府や一部の専門家が述べるほど容易なものではなく、このままでは牛肉産業の救世主とはならず、輸出戦略の方向性の再検討が必要であるという仮説の検証のために、国内外の現地調査、分析を行ったものである。とくに、先行研究が指摘している産地間競争が収まっているのか、また輸出戦略については顕示的消費財として販売していくことを目指すべきであるのかという点について重点を置き、国内調査は群馬、岐阜、京都、鹿児島食肉処理場や卸売業者、農協および生産者へ、国外調査は、香港、台湾、マレーシア、イギリス、オーストラリア、中国の卸・小売業者、飲食店など、可能な限りの訪問調査を行っている点は評価できる。

その結果、①現在有力な輸出先である食文化の近い香港や台湾は、すでに日本産牛肉、特に和牛の需要は飽和状態となっていること、マレーシアは、ハラール対応の認定施設数が少ないこと、オーストラリアとイギリスでは、食文化の違いによって、和牛の特徴から受け入れにくいことなどから、政府が掲げる3,600億円という目標は困難であることを実証している。②輸出業者は「和牛統一マーク」の必要性について理解は示しているものの、すでに輸出先市場で神戸牛など固有のブランドを確立していることが多く、輸出先市場において各ブランドの産地間競争が発生している状況であり、さらなる輸出拡大のためには、和牛統一マークの有用性を示し、政策的転換が必要であることを実証している。③輸出先市場では、豪州産 WAGYU がシェアを占めており、また海外において和牛は WAGYU と同じ表記となるため、供給力や生産コスト面で圧倒的に優位な豪州産 WAGYU に対して、個々のブランドで市場参入している和牛の消費には限界があること。また、国内の調査から和牛生産者は、生産した牛肉が輸出されている認識はなく、輸出への関心は高くない点などを明らかにしている。以上のことから、最終的に、現在の量的拡大政策は取るべき戦略ではなく、このままでは輸出拡大によって海外市場で過当競争により大幅に和牛の価格を下げざるを得なくなり、現在の和牛ブランドを失墜させ、日本の牛肉産業に悪影響を与えてしまう可能性を指摘し、その上で日本の牛肉産業の効率化への改善や生産体制の強化、輸出のための統一ブランド確立を優先し、輸出向けの牛肉を生産するなどのマーケット戦略の必要の根拠を新たに提示している。

よって本論文は、博士（生物資源科学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和4年2月22日